

中・四国アメリカ文学会会報 No. 43

THE CHU-SHIKOKU
AMERICAN LITERATURE SOCIETY
BULLETIN No. 43

中・四国アメリカ文学会
June 2004

目 次

中・四国アメリカ文学会第 33 回大会（会場：島根大学学生会館）要旨

〔研究発表〕

1. Lafcadio Hearn の *Chita* における海の描写 横山 純子 2
2. 預言者的詩人としてのアレン・ギンズバーグ——“Howl”(1956)
におけるエレミヤ的要素の考察をとおして..... 谷岡 知美 3
3. ジョン・スタインベック *The Pastures of Heaven*
に見られるケルト性について..... 酒井 康宏 4
4. *Omoo* における「飲酒」擁護..... 斎木 郁乃 5
5. ホールデンが「オールド・スポーツ」に参る理由
——サリンジャーと文学市場..... 上西 哲雄 6
6. Leslie Fiedler と批評の軌跡..... 里内 克巳 7

〔特別講演〕

- Faulkner and the American South..... Noel Polk 8

〔シンポジウム〕

21世紀から見る 1960年代アメリカ演劇

司会 小野紳一郎 9

1. オニール劇における家族像..... 勝 健一郎 10
2. 『転落の後』にみる夫婦・家族の有り様..... 山下 興作 11
3. 「酔いどれ時代」と反リアリズム
——Tennessee Williams の 60年代 山野 敬士 12
4. オールビー劇における夫婦像..... 小野紳一郎 13

平成 15 年度活動報告..... 14

平成 15 年度会計報告 18

中・四国アメリカ文学会会則..... 20

会員名簿..... 23

編集後記..... 新田 玲子 35

中・四国アメリカ文学会第 33 回大会

研究発表・特別講演・シンポジウム発題要旨

研究発表 1

Lafcadio Hearn の *Chita* における海の描写

広島大学（院） 横山 純子

Chita は Lafcadio Hearn(1850-1904)が初めて書いた小説である。ハーンは小説家になりたいという夢を持ち、*Chita* に続けて *Youma*、*Karma* という小説を書いている。*Chita* はハーンが 1883 年に聞いたデルニエール島のハリケーンで生き残った少女の話を書かれ、1888 年 4 月に *Harper's New Monthly* に載り、1889 年に Harpers Brothers より出版されたものである。

主人公の *Chita* はハリケーンが来て母親は海で死に、獵師に助けられ、その夫妻に引き取られ、育てられることになる。成長した *Chita* の元に偶然に本当の父親が現れるが、その父親は伝染病に罹り、瀕死で親子のなをりをあげないうちに、亡くなるという話である。海で失われた母親のイメージはハーンの幼い頃の追憶ともつながり、それは“A Dream of a Summer Day”(「夏の日の夢」)に通じるものがあり、“By the Japanese Sea”(「日本海に沿うて」)中の夢の中で海とともに回想される母親のイメージと重なる。*Chita* は従来の評価ではプロット、人物像が弱いとみなされ、ハーン自身も失敗作と認めているものである。人物像は弱いところはあるが、海がこの作品で主要な位置を占め、よく描きだされている。またこの海の描写には、ハーンのアイルランドでの思い出がこの作品に投影されているとハーンの伝記作家ニナ・ケナードが指摘しているように、ハーンのこれまでの人生が投影されている。この作品を紐解くことがハーンの商品の創作過程に切り込む興味ある探求になると思われる。*Chita* の論考は山下宏一氏の『「チタ」を読む その構成原理と主題」や銭本健二氏の論文「小泉八雲と海(I)」や西川秀勝氏の論文「Lafcadio Hearn の小説 *Chita* について 海への郷愁と神話的幻想」や東田敏夫氏の論文「*Chita* 論 Hearn と自然」等数少なく、*Chita* にはあまり光があてられてこなかったと思われる。今回の発表では *Chita* の海の描写に着目して作品の再評価をはかりたい。

預言者的詩人としてのアレン・ギンズバーグ——

“Howl” (1956)におけるエレミヤ的要素の考察をとおして

広島女学院大学(院) 谷岡 知美

ビート詩人、アレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg, 1926-95)が、1955年にサンフランシスコのシックス・ギャラリーで朗読して鮮烈な衝撃を与えた詩、『吠える』(“Howl”)は、3部から構成されている。第1部では、「僕の世代の最良の精神」(“the best mind of my generation”)が破壊され、それを嘆き吠え叫ぶ人々(「ヒップスター」(“hipster”)と呼ばれるアウトサイダー的人間)の様子が描かれている。第2部では、経済的、物質的に繁栄はしたが、人間性は失われてしまった当時のアメリカ社会を、「モーラック」(“Moloch”)に例えることで告発する。続く第3部は、ギンズバーグの友人、カール・ソロモン(Carl Solomon)をうたったエレジーであり、ソロモンをとおして正気と狂気の問題を問い質している。これらの詩をとおして、語り手は預言者的なことばや姿勢を混ぜ合わせて語るのである。それは概して今までウォルト・ホイットマン(Walt Whitman, 1819-92)の影響だろうと言われている。確かにギンズバーグは、サンフランシスコのスーパーマーケットにホイットマンの姿を重ね、現代における彼の存在感を浮かび上がらせている。また、ホイットマンを思わせる、息の長いリズムや、並列的修辞法を使っていることも確かである。しかし、ギンズバーグの緊迫感がただよう預言者的な姿勢やことばは、『エレミヤ書』からの影響も大きいのではないか。

旧約聖書に収められている『エレミヤ書』は、ユダヤ教やキリスト教の世界において、イザヤ、エゼキエル等と並び大預言者と位置付けられている、エレミヤの生涯と預言を集成したものである。神(ヤハウェ)の声を吹き込まれたエレミヤは、エルサレム陥落の危機にあった古代イスラエルのユダヤ王国末期の時代を舞台に、民にヤハウェへの回心を説き、イスラエルと神との間の新しい関係、新しい契約を預言した。エレミヤにとって、当時の神への信仰は、形骸化した状態として映っていた。彼は個人と神の関係、つまり個人的信仰と敬虔を重要視し、国の没落の危機を民に警告している。

今回の発表では、“Howl”に見いだすことのできる『エレミヤ書』の表象を考察していく。特に、“Howl”の第2部におけるアメリカ(言い換えると、第一部で「最良の精神」を破壊した「モーラック」と、『エレミヤ書』におけるエルサレムとを比較する。さらには、ギンズバーグと「モーラック」の関係、そしてエレミヤとエルサレムの関係を分析し、最終的には預言者的詩人(“prophet-poet”)としてのギンズバーグ像を明らかにしていきたい。

ジョン・スタインベック *The Pastures of Heaven*

に見られるケルト性について

米子工業高専 酒井 康宏

当発表は、スタインベック文学におけるケルト性についての一試論である。すでにご存知のように、スタインベックの母方の祖先は北アイルランドであり、少年時代に母親からの読み聞かせによって、「ストーリーテラー」としてのスタインベックの文筆能力は培われたと言っても過言ではない故、作家の「アイルランド性」について考察することは、ますます意義があるように思われる。

この発表では、ケルト文化の一側面である「民話学」、「妖精学」と1932年に発表された作品、*The Pastures of Heaven* との関連を考察する。スタインベックは、その書架リストから、Fraser の『金枝篇』に大変造詣が深く、また、アイルランドのノーベル賞受賞詩人、W.B.イエイツの詩にも大変造詣が深いことが窺われる。特に、当作品第4章では、ケルト文化の意義を説き、「取替え子」(changelings)を彷彿させる記述がある。

いわゆる「ハーフ・ウィット」として描かれているツラレシートを「取替え子」として捉えることは不可能だろうか？彼は、物語の最後の場面で、果樹園に入りケルトの妖精ノームを探しに土を掘っていくが、彼の心は「故郷へ帰る喜び」で溢れている。しかし、何らかの「呪い」によって、殺人を犯す寸前のところで精神異常者の保護施設へと送られるはめになる。

その他の章でも、多くの研究者や批評家の指摘するように、この作品には何らかの「呪い」が存在する。その「呪い」はケルト文化に由来するとは考えられないだろうか？もしそうだとすれば、この作品の舞台「コラール・デ・ティエラ」は、W.B.イエイツの詩の舞台となる「ベン・ブルベン」がそっくりそのままアメリカ文化に移植されたアイルランド表象と考えられないであろうか？これらのことを発表ではじっくりと考察したい。

最後に、私を「ケルト文化」と「アメリカ文化」との比較文化研究へと誘ってくださった元島根大学教授、故銭本健二先生への感謝と追悼の意を表明し、当研究の事始めとすることが出来れば幸いである。

Omoo における「飲酒」擁護

島根大学 齋木 郁乃

Melville の二つ目の長編小説である *Omoo* (1847) は、他の作品に比べると、今日ではあまり批評的な関心を寄せられない、どちらかといえば駄作と見なされている。一貫性のない脱線だらけのストーリーが軽い調子で語られ、説得力のある格別な主張にも欠けるように見えるこの作品、それもそのはず、だって語り手は物語の冒頭から「酔っ払って」いるのだから。

酔っているのは語り手だけではない。捕鯨船ジュリア号の一等航海士、ジョン・ジャーミンは大酒のみで太陽の位置すらおぼつかず、船医のロング・ゴーストは酒で原住民との親睦を図ろうとし、他の船員たちも夜な夜な宴会に熱心で鯨の見張りも放棄する始末。物語の大半が酒盛りの場面で成り立っているといっても過言ではない。

それならば、*Omoo* はやはり、酔っ払いのたわごちに過ぎない、取るに足らない作品なのだろうか。この作品が、同時代の読者にとっては、処女作 *Typee* と並ぶ Melville の代表作であったことに着目すると、少なくとも当時の読者が慣れ親しんだ言説であったことは間違いないだろう。1840 年代に大衆が熱心に耳を傾けた「酔っ払いの言説」といえば、John B. Gough をはじめとする、ワシントンニアン禁酒運動家たちの演説である。

植民地時代から、アメリカにおいて、過度の飲酒は犯罪を呼び、労働力を低下させ、家庭の崩壊をまねく深刻な社会問題であった。19 世紀に入ると、聖職者と産業資本家が協力して、組織的な禁酒運動を展開するようになり、1850 年代の禁酒法制定で一つの頂点に達するのだが、その直前の 1840 年代には、禁酒運動の脱宗教化という興味深い変化が見られた。それまで禁酒を説くのはもっぱら聖職者の役割だったのだが、ワシントンニアンと呼ばれる「もと飲んだくれ」たちが自らの体験を露悪趣味的に語る講演会が人気を博し、禁酒運動は一種の見世物の様相を呈するようになるのだ。本発表は、*Omoo* を、このような世俗化された禁酒運動の言説のひとつとして読み解く試みである。

ホールデンが「オールド・スポーツ」に参る理由

- サリンジャーと文学市場 -

北星学園大学 上西哲雄

J. D. サリンジャー (Salinger) の『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(*The Catcher in the Rye* 1951 .以下『キャッチャー』) には、語り手である主人公ホールデン (Holden Caulfield) が文学についての彼の趣味を披露する箇所がある。兄 D B がヘミングウェイ (Ernest Hemingway) の『武器よさらば』(*Farewell to Arms* 1929) を高く評価するのを批判しつつ、ホールデンはフィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald) の『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby* 1925) に夢中だと宣言している。18章の結末近く、次のように語る所だ。

I was crazy about *The Great Gatsby*. Old Gatsby. Old sport. That killed me.

この短いテキストを手がかりに、サリンジャーが同時代の文学市場をどのように見ていたかを探ってみようというのが、この発表の主旨である。

1951年に出版された『キャッチャー』は、実質的には1940年代、とりわけ第二次世界大戦後ということ言えば1940年代後半を表現しているはずだ。この時期はフィッツジェラルド研究にとって重要な時期のひとつである。1930年代を通じて凋落を続けたフィッツジェラルドの評価が1940年に底を打ち、その年の彼の死と共に復活に向けて高まっていく。1940年代前半は彼の文学仲間、批評家、研究者の間での再評価にとどまっていたのが、1940年代後半には一般読者の間での評判が一気に広がる。『キャッチャー』を構想し執筆に取り組んでいたサリンジャーの目の前に広がる文学市場ではこのようなことが起こっていたのである。

一方サリンジャーの『グレート・ギャツビー』との出会いは古い。1930年代末、フィッツジェラルドがハリウwoodsの片隅に忘れ去られていた時に彼の作品を知り、夢中になったとされている。作家サリンジャーは、『グレート・ギャツビー』の何を評価し、一時は全作品が絶版になるまで落ち込みながら、その後幅広い読者を集めるまでにフィッツジェラルドを復活させた1940年代の文学市場を、どのように評価していたのか。ホールデンが「オールド・スポーツ」という言葉に参る理由を探る中で考えてみたい。

Leslie Fiedler と批評の軌跡

大阪大学 里内克巳

高名なユダヤ系批評家・小説家である Leslie Fiedler が昨年 1 月に逝去したが、これを機に、批評界に長年君臨した巨人の多彩な活動の軌跡を、あらためて振り返ってみたい。言うまでもなく Fiedler の活動は、大著 *Love and Death in the American Novel* (1960. 改訂 66) で最初のピークを迎える。この前後の時期は、Richard Chase や Leo Marx といった論者によるアメリカ文学・文化研究の「スタンダード」が勢揃いした時代であるが、近年は主として政治的な観点から、それらの著作が批判されがちなのは周知の通りである。このような角度からの Fiedler への批判は、ある部分では正鵠を射るものの、1970 年代から 80 年代にかけての Fiedler が、「文学」から「大衆文化」へと関心を移行させていった事実にまで射程を拡大して論じる試みは、現在のところほとんどない。

今回の発表では、アメリカ文学を代表する二人の作家への評価にポイントを置き、文学批評の全般的な変化と Fiedler との微妙な関係を明らかにしたい。Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* (1852) と Mark Twain の *Adventures of Huckleberry Finn* (1885) は、南北戦争前の奴隷制を扱う点でよく比較される小説だが、20 世紀初めまでは社会的影響力の点で前者の方がはるかに高く評価されていた。だが第二次大戦後、低級な抗議小説というレッテルを貼られた Stowe の小説は読まれなくなり、逆に Twain の小説には極端に高い評価が与えられていく。そして近年の政治的批評の復権により、二つの小説の序列には再び逆転が起きつつある。こうした批評の評価軸の変転に対し、Fiedler は距離を置き独自の路線を進んでいたのか。それとも巧みに歩調を合わせていたのか。その問題を、*Love and Death* とその続編とも言うべき *What Was Literature?* (1982) における Twain と Stowe の取り上げ方に注目することによって考えてみたい。

特別講演

Faulkner and the American South

University of Southern Mississippi, Noel Polk

“Faulkner and the American South” will give a brief overview of the South that Faulkner lived in, the Jim Crow South. It will be a brief history of the South, with an emphasis on racial problems that were a holdover from the Slave South, the Civil War South, and Reconstruction. I will hope to suggest numerous ways in which the South is a very large and complicated place, and then try to focus on Faulkner’s relationship with his own home state of Mississippi, perhaps the most “Southern” of the Southern states, the one perhaps most fully resistant to progress in race relations during Faulkner’s lifetime. “Faulkner and the American South” will look at some of Faulkner’s treatments of the “South” in his fiction, and finally focus on a wonderful but little-known semi-autobiographical essay of his called “Mississippi,” first published in 1953, in which he meditates directly on his relationship with his own home.

シンポジウム

21 世紀から見る 1960 年代アメリカ演劇

司会 松山東雲女子大学 小野 紳一郎

1960 年代のアメリカはベトナム戦争、黒人解放、公民権運動、学園紛争、ウーマン・リブ運動等のアメリカ社会を取り巻く文化的環境の変化によって、それまでの家族・家庭のあり方が多様化していく大きなうねりともいえるべき時代であった。このような時代背景の元で、現代アメリカ演劇を代表する劇作家達の劇作品に共通する主題の一つに、家族・家庭の関係のあり方が挙げられる。

このシンポジウムでは現代アメリカ演劇を代表する 4 人の劇作家、すなわちユージン・オニール（勝氏担当）、アーサー・ミラー（山下氏担当）、テネシー・ウィリアムズ（山野氏担当）、エドワード・オールビー（小野担当）の劇作品における家族・家庭の捉え方を 21 世紀の視座から照射し検討することによって、1960 年代アメリカ演劇さらには 1960 年代アメリカ社会を再考してみたい。

オニール劇における家族像

安田女子大学 勝 健一郎

Eugene O'Neill(1888? 1953)にとって、劇作家としての役割は、「現代という時代の病根を作家自身の眼に映じるままに摘出することだ」と言っている。1936年にノーベル賞を獲得し、4度のピューリッツァー賞に輝いている彼の実人生は苦痛の連続であった。三度の結婚により、2男1女の父となったが、子供達とはほとんど絶縁状態である。

ここで、私が、オニールの作品を思い起こす時、驚嘆するほど、現代的、すなわち、2004年の日本のどこかの家庭で起こっていてもおかしくないとおもわれる事項を3大作の中から抽出してみたいと思う。

Desire Under the Elms(produced 1924)においては、75歳の父のところに35歳の女性が後妻としてくるのだが、この女性と、この家の25歳の息子のあいだに子供が生まれるのだ。そこで、種馬にすぎなかったのだと誤解し冷淡になった男の心を、自分の方へ引き戻す為に、この後妻が嬰兒を窒息死させてしまうことである。

Strange Interlude(produced 1928)では、ヒロインのNinaが、診てもらっている若い医師の勧めで結婚し、みごもって、新婚旅行中、夫の故郷に立ち寄るのだが、そこで夫の実母から、「すぐに墮胎しなさい。精神異常の血縁だからね。息子のかわりに立派な男とのあいだに子供をもうけ、うまくやっけていきなさい」といわれ、旅行から帰てすぐに墮胎することだ。しかも、その後、若い医師と子供をもうけるだけの目的のために、夫のいない、昼間にまじわることである。そして子度が生まれ、夫の子として平然と育てていくことである。現在、アメリカでは、優秀な男性の精子の売買は、平然と行われていると聞く。

Long Day's Journey into Night(produced 1956)は、1960年代以降に多くの観客の目にふれたものであり、2回も映画化された、自伝劇としてほまれ高い作品である。この作品に登場する4人は、すべて実在したオニールの実父、実母そして実兄と本人である。今回の発表では、これまでのオニールの舞台表現としての音響効果を含め、あらゆる実験を試みた種々の手法をかなぐりすてて、すべて台詞によって描ききった、私たちの心にまっすぐにぶつかってくるこの*Long Day's Journey into Night*にできるかぎり焦点を絞って論ずる予定である。

『転落の後』にみる夫婦・家族の有り様

高知大学 山下興作

アーサー・ミラーの *After the Fall* (1964年1月初演)は、周知のように、ミラーとマリリン・モンローの結婚と破局という伝記的事実を背景とした作品である。マリリンの自殺(1962年8月)というセンセーショナルな事件から1年半にも満たない時期に発表されたこともあり、この作品はミラーの悪趣味な暴露趣味の産物と受け取られ、攻撃にさらされることになった。この発表当時の評価の影響は長く尾を引き、その後もこの作品を論じる際には、作家の自伝的側面からアプローチをかけることが多かった。

しかし、発表から40年を経てようやく作品の間に冷静な距離が取れるようになったためか、そうした呪縛から解き放たれた解釈が施されるようになったようだ。そこで、今回は作家の実生活とのかかわりはいったん括弧でくくり、21世紀の今日から見たときに *After the Fall* で描かれた夫婦像、家族像から何が読み取れるのか、さらにはそれらを通してミラーが示そうとしたあるべき人間関係について、比較的最近の舞台成果を視野に入れながら考察を進めていきたい。

「酔いどれ時代」と反リアリズム

——Tennessee Williams の 60 年代

別府大学 山野敬士

自ら『酔いどれ時代』(“Stoned Age”)と呼んだ 1960 年代に Williams が手がけた作品の多くは、商業的にも批評的にも失敗作という烙印を押されてきた。これらの作品に共通するのは、初期の作品が持っていた抒情的な描写が後退することと、リアリズムの側面が欠落することにより、因果律や登場人物の葛藤という基本概念に基づく解釈が不可能になることにあると思われる。20 世紀後半から今世紀にかけて、これらの作品に対する再読解が成されてきたが、それらは、リアリズムの後退を同時代の作家(アルトーやベケット)や演劇の流行(ハプニングやパフォーマンス)、非西洋演劇(歌舞伎や能)、ポストモダニズムの哲学思想等との比較を通して考察している。今回の発表でも、それらの読解に従いながら、*Kingdom of Earth*(1968)と *The Two-Character Play*(1967)を中心に 1960 年代 Williams 劇を考察してみたい。また 20 世紀アメリカ演劇の一つの流れが、リアリズムという方法と家族劇という内容の協調により構築されてきたと一般的には考えられるので、上記の劇に描かれる奇妙な家族像をリアリズムの欠落という特徴に結びつけて考えることができればと思っている。

オールビー劇における夫婦像

松山東雲女子大学 小野 紳一郎

エドワード・オールビーは「古き良き 1950 年代までのアメリカの伝統的な「家父長主義」に根ざした理想的家庭像を冷笑し、男性(夫)を組み敷くたくましい女性(妻)を多くの劇作品で登場させている。

例えば、彼は“*Who’s Afraid of Virginia Woolf?*” (1962) のマーサに「大地母」的豊穡で多産のイメージを与えてジョージを尻に引かせるにもかかわらず、一方では二人の間には自身が生んだ子供を「実在」させていない。この「子供の不在」はその後のオールビー作品に共通するキーワードであろう。

単一性の結婚認定・少子化・DINKS 等、結婚・家族・家庭のあり方の多様化が見られる 21 世紀の現在から見ると、オールビー劇に登場する夫婦の有り方は現代の夫婦のあり方を予言していたとはいえないだろうか。

中・四国アメリカ文学会

平成 15 年度活動報告

(平成 15 年 4 月? 平成 16 年 3 月)

【平成 15 年】(2003 年)

『中・四国アメリカ文学研究』第 39 号発行(6 月 1 日)

『中・四国アメリカ文学会会報』第 42 号発行(6 月 1 日)

中・四国アメリカ文学会第 32 回大会

日時 平成 15 年 6 月 14 日(土)、15 日(日)

場所 就実大学図書館 〒703-8258 岡山市西川原 1-5-22 (Tel. 086-271-8134)

第 1 日 6 月日(土)

中・四国アメリカ文学会 平成 15 年度役員会 (11:00? 12:30)

開会式 (12:50? 13:00) 開会の辞 会長 天野雅文

研究発表 (13:00? 16:35)

- | | | |
|---|-------------------------|----------------|
| 1 . Stephen Crane のスラム表象と監獄
(13:00? 13:40) | 司会 就実大
発表 広島大(院) | 押谷善一郎
増崎 恒 |
| 2 . Isaac Bashevis Singer, The Slave
——Jacob の旅の意味
(13:40? 14:20) | 司会 広島大
発表 くらしき作陽大(非) | 新田 玲子
向井 純子 |
| 3 . 『デイジー・ミラー』における消費文化
(14:20? 15:00) | 司会 松山東雲女子大
発表 梅光学院大 | 別府 恵子
堤 千佳子 |
| 4 . 1960 年代アメリカ演劇と多文化社会——1966? 1967 年度
シーズンを中心として
(15:15? 15:55) | 司会 安田女子大
発表 松山東雲女子大 | 勝 健一郎
小野伸一郎 |
| 5 . Flannery O’Conner, “The Displaced Person” における
“displacement”の逆説
(15:55? 16:35) | 司会 広島修道大
発表 神戸女子大 | 森田 勝治
吉岡志津世 |

特別講演 (16:45? 17:45)

講師 巽 孝之 (慶應義塾大)
演題 アメリカ文学と大統領
司会 伊藤 詔子 (広島大)

懇親会

会場 就実大学G館「RIVER SIDE」(岡山市西川原 1-6-1 Tel. 086-271-8111)
司会 御手洗 博 (就実大学)

第2日 6月日(日)

シンポジウム (9:00? 12:30)

「21世紀に読み直すアメリカ小説——現実と虚構の架け橋を求めて」

司会・基調報告 岡山学院大 有木恭子

1. John Steinbeck の *The Moon Is Down* (1942)

——集団と個人の関係性 発題 熊本大(非) 馬渡 美幸

2. Melville と多文化主義

——風景描写を中心として 発題 愛媛大 藤江 啓子

3. *Moby-Dick* と Thomas Harris の *Hannibal*

——アメリカ同時多発テロをめぐって 発題 広島経済大 大地 真介

4. ホーソンとポストモダン

——アメリカン・ロマンスの^{いま}現在 発題 広島国際学院大 城戸 光世

総会 (12:30? 12:50) 議長 会長 天野 雅文

閉会式 (12:50? 13:00) 閉会の辞 副会長 田中 久男

「News Letter」第64号発行 (2003年7月31日)

秋季研究会

日時： 9月13日(土曜日)

場所： 安田女子大学8号館 8102号室(1階)

中・四国アメリカ文学会 支部運営委員会 13:00? 14:00

[研究発表]

1. 発表者：山下 育美 (広島女学院大[院]) 14:00? 14:40

題目： *On the Road* における Sal Paradise の旅について

司会者：光富 省吾（福岡大）

2. 発表者：山内 圭（新見公立短大）14:40? 15:20

題目：『怒りの葡萄』の演劇化と映画化

司会者：浜口 脩（広島大）

3. 発表者：Timothy Ervin 氏（安田女子大）15:30? 16:10

題目：On E.E.Cummings

司会者：新田 玲子（広島大）

「News Letter」第 65 号発行（2003 年 11 月 1 日）

冬季研究会

日時： 12 月 13 日（土曜日）14:20? 17:00

場所： 広島大学大学院文学研究科 大会議室（1 階）

中・四国アメリカ文学会 支部運営委員会 13:00? 14:00

[研究発表]

1. 発表者：澤崎 由起子（関西大 [院]）14:20? 15:00

題目：作家の死とオーサーシップ——

『帝国』の時代とドン・デリー口の *Mao II*

司会者：島 克也（広島大）

2. 発表者：藤吉 清次郎（活水女子大）15:00? 15:40

題目：『七破風の家』の結末について

司会者：中山 慶治（松山東雲女子大）

[講演]（16:00? 17:00）

講師：Dalia El-Shayal（カイロ大）

題目：“Jacob Lawrence’s Paintings:

Echoes from African-American Literary Thought”

司会者：吉田 美津（松山大）

* 忘年会: 17:30? 19:30（コットンクラブ）

【平成 16 年】(2004 年)

「News Letter」第 66 号発行（2003 年 1 月 31 日）

支部編集委員会 3月7日（日曜日） 13:30? 17:00
『中・四国アメリカ文学研究』第40号 編集委員会
松山大学 東本館4階、共同研究室
出席者 吉岡志津世、前田一平、吉田美津

春季研究会

日時： 3月13日（土曜日） 14:10? 16:20
場所： 広島女学院大学 人文館3階 301号室

中・四国アメリカ文学会 支部運営委員会 13:00? 14:00

[研究発表]

1. 発表者：福吉 崇（岡山大[院]） 14:10? 14:50
題 目：ポール・オースターと村上春樹——主人公の孤独についての考察
司会者：新田 玲子（広島大）
2. 発表者：栗原 武士（広島大[院]） 14:50? 15:30
題 目：非日常の隣人たち：Carverの短編“Menudo”
にみる人種間の精神的融和の可能性
司会者：稲田 勝彦（比治山大）
3. 発表者：的場 いづみ（広島大） 15:40? 16:20
題 目：ヴェトナム戦争表象としての『タクシー・ドライバー』
司会者：上西 哲雄（北星学園大）

中・四国アメリカ文学会会則

(名称)

第1条 本会は、中・四国アメリカ文学会(The Chu-Shikoku American Literature Society)と称し、事務局を事務局幹事長の所属機関に置く。

(目的)

第2条 本会はアメリカ文学の研究を行い、その成果の発表をつうじ研究水準の向上をはかり、あわせて内外学会との交流をはかることを目的とする。

(性格)

第3条 本会は日本アメリカ文学会に加盟し、その中・四国支部となる。

(会員の資格)

第4条 第2条の主旨に賛同する者は会員1名の推薦により会員になることができる。

(事業)

第5条 本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 大会および研究会の開催
2. 会誌および会報の発行
3. その他必要と認められる事業

(会費)

第6条 本会の会費は年額4,000円とする。ただし、学生会員は年額3,000円とする。

(役員)

第7条 本会に次の役員を置く。

会 長 (兼支部長)	1 名
副会長	1 名
評議員	若干名
幹事長	1 名
幹 事	若干名
支部運営委員	若干名
会 計	1 名
監 事	2 名
支部編集委員	若干名

本部代議員	3 名
本部大会運営委員	1 名
本部編集委員	1 名

- 1 . 会長は本会を代表し、会務を総轄する。会長の選出は評議員の互選による。
- 2 . 副会長は会長を補佐する。副会長の選出は評議員の互選による。
- 3 . 評議員会は本会に関する重要事項を審議し決定する。評議員は総会において選出する。評議員会は必要に応じて他の役員を加えることができる。
- 4 . 幹事長は会長の統轄のもとに幹事、そのほかの役員と協力して本会の会務を執行する。幹事長、幹事は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。
- 5 . 支部運営委員は、大会、研究会等支部の運営を補佐する。支部運営委員は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。支部運営委員会は、会長、副会長、幹事長、幹事、会計、支部運営委員で構成する。
- 6 . 会計は本会の財政を執行し、監事はその執行状況を監査する。会計ならびに監事は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。
- 7 . 支部編集委員は機関誌の編集を行う。支部編集委員は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。
- 8 . 代議員、本部大会運営委員、本部編集委員は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。

(役員 の 任期)

第 8 条 役員 の 任期 は 2 年 と し、再任 を 妨げ ない。た だ し、会 長、代 議 員、本 部 大 会 運 営 委 員、本 部 編 集 委 員 の 任 期 は 2 期 4 年 を 限 度 と す る。な お、本 部 の 会 長 ま た は 副 会 長 の 任 に あ る 代 議 員 は、重 任 す る こ と が で き る。

(顧 問)

第 9 条 本 会 は 顧 問 を 置 く こ と が で き る。顧 問 は 評 議 員 会 の 承 認 を 経 て 会 長 が 委 嘱 す る。顧 問 は 重 要 事 項 に 関 し て 評 議 員 の 諮 問 に 答 え る。

(総 会)

第 1 0 条 本 会 は 原 則 と し て 毎 年 1 回 総 会 を 開 く。

付 則

こ の 会 則 は、昭 和 53 年 4 月 1 日 か ら 施 行 す る。

こ の 改 正 会 則 は、昭 和 60 年 7 月 1 日 か ら 施 行 す る。

こ の 改 正 会 則 は、昭 和 62 年 6 月 28 日 か ら 施 行 す る。

こ の 改 正 会 則 は、昭 和 63 年 6 月 26 日 か ら 施 行 す る。

こ の 改 正 会 則 は、平 成 4 年 6 月 21 日 か ら 施 行 す る。

こ の 改 正 会 則 は、平 成 7 年 6 月 25 日 か ら 施 行 す る。

この改正会則は、平成 9 年 6 月 23 日から施行する。
この改正会則は、平成 15 年 6 月 15 日から施行する。

編集後記

- * 『会報 No.43』をお届けします。「中・四国アメリカ文学会第 33 回大会」にご持参下さい。
- * 新入会員は以下の通りです。(順不同、敬称略)
真野 剛、横山 純子、広瀬 佳司、栗原 武士、藤沢 徹也、
吉福 崇、東 千津子、中村 日野実、小畑 拓也、田坂 崇、
日下 隆司、山辺 省太
- * 退会者は以下の通りです。(順不同、敬称略)
飛驒 知法、引田順一、河野 皓、吉岡 葉子、桂 宥子、
坪井 清彦(逝去に伴う退会)
(ただし、上記退会者以外にも、会費の3年間未納により会員名簿から削除している場合があります。)
- * 平成 16 年度支部大会及び全国大会で発表なさる会員の皆様のご健闘をお祈り致します。また、司会の先生方には大変お世話になりますが、どうぞ宜しくお願い致します。
- * 中・四国アメリカ文学会の会員数は、平成 15 年 4 月現在で 191 名です。皆様のお近くで入会希望の方がいらっしゃいましたら、事務局までご連絡下さい。また、会員名簿に脱落、誤記、その他お気づきの点がありましたら、併せてご一報下さい。
- * 今年度から事務局を担当することになりました。今までの事務局長がいかにご苦労なされたか、あらためて実感しております。生来きめ細かな気配りに欠けるうえ、初年度ということもあり、会員の方には何かとご迷惑をおかけしていることと思います。ここに深くお詫びを申し上げ、会員の皆様のご協力、ご支援を改めてお願い致します。まる一年が過ぎ、少しずつ仕事を覚えておりますが、それでもまだ至らぬところが多々あるかと存じます。お気づきの点やご要望がございましたら、どうぞご遠慮なくお知らせ下さい。なお、役員の方々には大変ご苦労をおかけしておりますが、引き続き多大なご尽力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

幹事長 新田 玲子

中・四国アメリカ文学会会報 No. 43

The Chu-Shikoku American Literature Society

Bulletin No. 43

2004年6月1日発行

発行者 中・四国アメリカ文学会

代表者 会長 田中 久男

事務局 広島大学大学院文学研究科 新田研究室

〒739-8522 東広島市鏡山 1-2-3

広島大学大学院文学研究科

Tel. & Fax 082-424-6684

e-mail reinita@hiroshima-u.ac.jp

URL: <http://www.chushi-als.org>

振替 01380-0-22492

作製 中・四国アメリカ文学会事務局

印刷 ニシキプリント

〒739-2117 東広島市高屋台 2 丁目 1-12 Tel. 082-434-6954
